教育実習の充実に向けた取り組み

—事業報告—

亀田隼人　松本直巳　中村昌宏　山本由佳　奥住秀之

Ⅰ　はじめに

東京学芸大学附属特別支援学校（以下、本校）における学校経営方針を受けて、教育実習の充実に向けた取り組みを行った。

今年度は昨年度同様に、本学の特別支援教育専攻の学生に対する「必修実習」と教育系全課程の学生に対する「選択実習」を実施した。以下に、今年度の教育実習に関する各取り組みを報告する。

Ⅱ　各取り組みについての報告

１）事前事後指導の実施

本学においては、前年に引き続き、４年次前期に、特別支援学校で教育実習を行うために必要な基本的態度、知識、技能を獲得することをねらいとした「特別支援学校教育実習事前事後指導」が設定された。内容は大学での講義、本校での観察実習、プレ実習、ポスト実習であった。

（１）大学での講義

学校や各学部の特徴や様子、授業の意義、特別支援学校の学習指導案の書き方などについて理解することを目的に行った。４月下旬から５月の中旬にかけて、各学部主事や教育実習担当教員が大学に出向いて講義を行った。

（２）観察実習の実施

観察実習は、学生自身が本校の授業を観察することを通して、本校の雰囲気や活動の様子はもちろん、幼児、児童、生徒のライフステージにおける指導やその系統性について学習することを目的として設定した実習であった。大学での講義の期間とほぼ同時期に設定し、必修実習を受ける学生を対象に実施した。幼稚部、小学部、中学部、高等部の授業観察日（４日）と、春のレクリエーション大会の予行と大会当日（２日）、全学部を通しての授業観察日（１日）の計７日を設定し、春のレクリエーションを含めた２日以上の参加を原則とした。記録からは２～３日の参加が多く、設定日の中では、全学部を通しての授業観察日への参加が多かった。この結果は、学生にとってこの時期が教員採用試験等で時間の確保が難しい時期であることも理由の一つだと考えた。学生は、大学における講義や観察実習を受けた後に配属学部の希望を提出した。

（３）プレ実習の実施

プレ実習では、学生は配属学部の授業を見学するだけでなく実際に授業に参加することで子どもたちとの関係づくりを行った。指導教員から直接指導を受けながらより具体的に子どもたちの実態を把握し、実習期間に自分自身が行う授業についてのイメージを膨らませる期間として配属学部決定後のおよそ２ヶ月間を設定した。また、夏季休業中の行事などへも参加を促した。プレ実習では、学生各人が指導教員と連絡を取り合いな

がら日程を調整した。実習後に、その日の「記録レポート」を作成して、大学の「事前事後指導」担当教員に提出し必要に応じて指導を受けた。３～４日間の参加が多かった。

（４）ポスト実習の実施

ポスト実習は、実習期間に全員が行う研究授業や授業研究会をとおして学びとったことを次につなげる実践の場として、実習期間後に設定された。プレ実習と同様、学生が自分の意思で指導教員に連絡をし、日程を組んだ。必修実習を受けた学生のうち数名が継続してポスト実習に参加したが、多くの学生は他の教育実習との兼ね合い等の理由で参加しなかった。特に選択実習を受けた学生は卒業を間近に控え参加が難しい状況であった。

２）本実習の実施

必修実習が３週間、選択実習が２週間の設定であった。期間中には校長、副校長、進路指導主任、養護教諭、栄養教諭、相談部専任による講話を行った。また、今年度は、「教育実習に関する情報セキュリティーの扱いについて（平成25年度版）」を作成した。本実習開始前には、これを学生に配布して情報セキュリティーへの意識をもたせた。各学生に専用のUSBメモリーを渡し、教育実習に関するすべてのデータの取扱いをその中で行うようにした。実習終了時には、指導教員の立ち会いの下でUSBメモリー内のデータを消去し、返却させた。これにより指導教員の業務は増えたが、これまで各指導教員に任されていた個人情報の管理を一律に行うことができるようになった。情報管理の方法についての理解をいかに深めるかが今後の課題となろう。

Ⅲ　まとめ

教育実習終了後に学生に対して行ったアンケートからは、観察実習やプレ実習、ポスト実習が、限られた本実習を充実したものにするため有効であったことを伺うことができた。必修実習、選択実習ともに、本校や大学の授業歴等の関係で十分な日数が確保しにくいという現状はあるが、学生にそれぞれの実習の意義を明確に伝える工夫や、学生が早い年次から来校できるような工夫を、大学と連携しながら考えていく必要がある。